



## ごあいさつ

秋田市長 穂積 志

大森山動物園は、ここ大森山に開園して今年9月1日で満50歳の誕生日を迎えます。

大森山動物園は、観光施設であるだけでなく、子どもたちの豊かな感性を育む教育の場や、繁殖活動を通じて希少動物の種の保存を担う場として、多様な役割を果たしており、この大きな節目の年を迎えることができましたのは、ひとえに動物園を愛する皆さまのご理解とご支援の賜であり、心から御礼申し上げます。

大森山動物園としての歴史は、千秋公園にあった児童動物園が大森山に移転した1973年から始まりました。1991年には市政100周年記念事業として、ゾウとキリンの導入が実現し、その年は過去最高の来園者数35万人を記録しました。

その後も「チンパンジーの森」や「王者の森」など、ハード面の拡充を図るとともに、「まんまタイム」や「どうぶつ解説」などのソフト面でも、来園者楽しんでいただくための創意工夫を重ねたほか、動物園と公園の一体的な整備を行うなど、大森山全体にぎわいづくりのため常に新しい挑戦を続け、2022年には累計入園者数が1,200万人を超えるなど、大森山動物園は東北を代表する動物園のひとつとして成長してまいりました。

これからも、大森山動物園は開園50周年のテーマ「ありがとう50年～つながり、ともに未来へ～」の言葉のとおり、これまで支えていただいた多くの方々への感謝の気持ちを常に忘れずに、皆さまとのつながりを大切にしながら、60周年、70周年の未来へと羽ばたいてまいります。皆さまにおかれましては、今後も変わらぬご愛顧とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。



## 祝辞

秋田市議会議員 菅原 琢哉

大森山動物園の開園50周年、誠におめでとうございませう。

1973年に秋田市中心部の千秋公園から大森山に移転して以来、動物園は、観光・教育そして種の保存の場として、半世紀もの長きに渡り、その重要な役割を果たし続けてこられたことに対し、市議会を代表して敬意を表します。

この50年の間に、ゾウやキリンなどの人気動物の導入や各展示場等の整備に加え、「まんまタイム」などのイベントや「大森山アートプロジェクト」などの新しい取り組みを試行錯誤しながら企画・開催することで、現在の動物園が作り上げられたことは感慨深いものがあります。中でも、短い命を力いっぱい生き抜いた、2002年の義足のキリン「たいよう」の物語は、後世に語り継がれていくものと思います。

動物園内には様々な樹木や草花が生い茂り、自然の沼「塩曳湯」は希少なゼニタナゴの保全池となっているほか、約70haにおよぶ豊かな自然の大森山公園と一体となった、まさに緑に包まれた森の動物園として、秋田市民はもとより県内外から多くの人々が訪れる憩いの場となっております。

また、「自然および命の大切さを学び、動物の命をつなぐ場」を大森山動物園条例の理念に掲げ、学校教育とも連携した「ふれあい教室」や「飼育作業体験」などを実施しているほか、希少なニホンイヌワシやユキヒヨウの繁殖に成功するなど、種の保存にも取り組んでおり、動物園の果たす役割はますます重要となってきたものと考えております。

市議会といたしましても、開園以来、動物の飼育展示や施設の拡充整備に努めてこられた市当局、並びに地元の皆さまをはじめとする多くの支援者のご尽力とご労苦に対し、感謝を申し上げますとともに、50周年を契機として、大森山動物園がこれまで以上に市民から愛される動物園となることを心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



## 記念誌発行にあたり

園長 小松 守

大森山動物園は1973年の開園から50年の歩みを刻んでまいりました。この半世紀は、人の価値観や社会の意識が大きく変わり、少子高齢化とともに地方の人口減少が始まり、経済の不安定さ、さらには地球環境の変化を象徴する野生動物の絶滅など、動物園を取り巻く環境が大きく変化した時代だったといえます。

このような変化が激しい時代にあって動物園が守られ、成長し続けることができたのは、大森山動物園を市民の大切な財産と認めてくださる多くの人々、動物園と様々に関わってくださった方々、そして1,200万人を超える来園者の皆さまに支え続けられてきたからです。そして動物園を楽しみに来園される人々の期待に応えようと懸命に努力してきたその時々スタッフ、生きる姿を人々に披露しながら何かを伝え、教え、感動を与え続けてくれた数多くの動物たち、こうした力の集結があったからといえます。現場にいて動物園を48年間見続けてきた者として、このことを強く感じます。大森山動物園はこうした様々な思いが積み重なって築かれてきたのです。

本誌コミュニケーション106号は、86号の開園40周年号と同様に50周年記念号として編集し、動物園が歩んできた記録の整理保存とともに、次世代を担う若いスタッフに未来を展望してもらいました。

秋田の動物園の未来を切り拓くために、そして、秋田の動物園を支えてくださった方々に感謝の心を込めて。

### 千秋公園から大森山公園へ

秋田に初めて動物園ができたのは戦後すぐの1950年のことでした。この時代、全国で動物園があったのは大都会の東京、京都、大阪、名古屋のほか地方では数園程度しかない時代でした。

秋田県は1947年の児童福祉法制定を受け、全国に先駆けて千秋公園に児童会館の設置を計画しました。その頃、国内では戦後の子どもたちを元気づけようと1949年にインドから平和の使者として上野動物園にゾウのインディアラが贈られ、翌年には北日本でゾウ列車の運行が計画されていたようです。

1950年8月、秋田県は子どもたちの明るい未来のためにと、千秋公園に児童会館と児童動物園をオープンしました。同時に児童文化博覧会も開催し、千秋公園にそのインディアラもやってきました。8月1日から25日間の来場者数は30万人にも達し、国鉄は秋田駅行き臨時列車を走らせたそうです。当時の県人口は約130万人ですから、ほぼ県民の4人に1人が来場したことになります。

その後、1953年に千秋公園の管理が秋田県から秋田市に移管され、動物園も市立児童動物園となりましたが、街の発展の中で様々な課題も抱えるようになっていました。

秋田市は1956年の都市公園法の成立を受け、人間形成と子どもの心を育むことをテーマに公園整備を検討、市制80周年の1969年には秋田市南西部の現在地、大森山に「こどもの国」建設計画を決めました。整備の目玉は動物園で、1971年には将来的にゾウも含めた121種740点を保有する動物園の建設計画が発表されています。

千秋公園の児童動物園は1973年8月10日に閉園し、同月15、16日に動物等の大移動が行われ、9月1日に大森山公園と動物園が華々しく同時開園となりました。広さは児童動物園の約20倍の8ha、実際の展示動物は93種約280点と計画通りではありませんでしたが、当時の市民は大いに高揚し、冬期閉園までの約3か月の入園者数は約12万6千人にも上りました。

また、大森山公園には動物園とともに、宿泊研修施設である「大森山少年の家」なども設置され、公園や動物園づくりで子どもを育みたいという先人の思いが伝わってきます。

(動物園の歩みは8ページからの特集をご覧ください)



児童文化博覧会にやってきたゾウのインディアラ



児童動物園の入口